

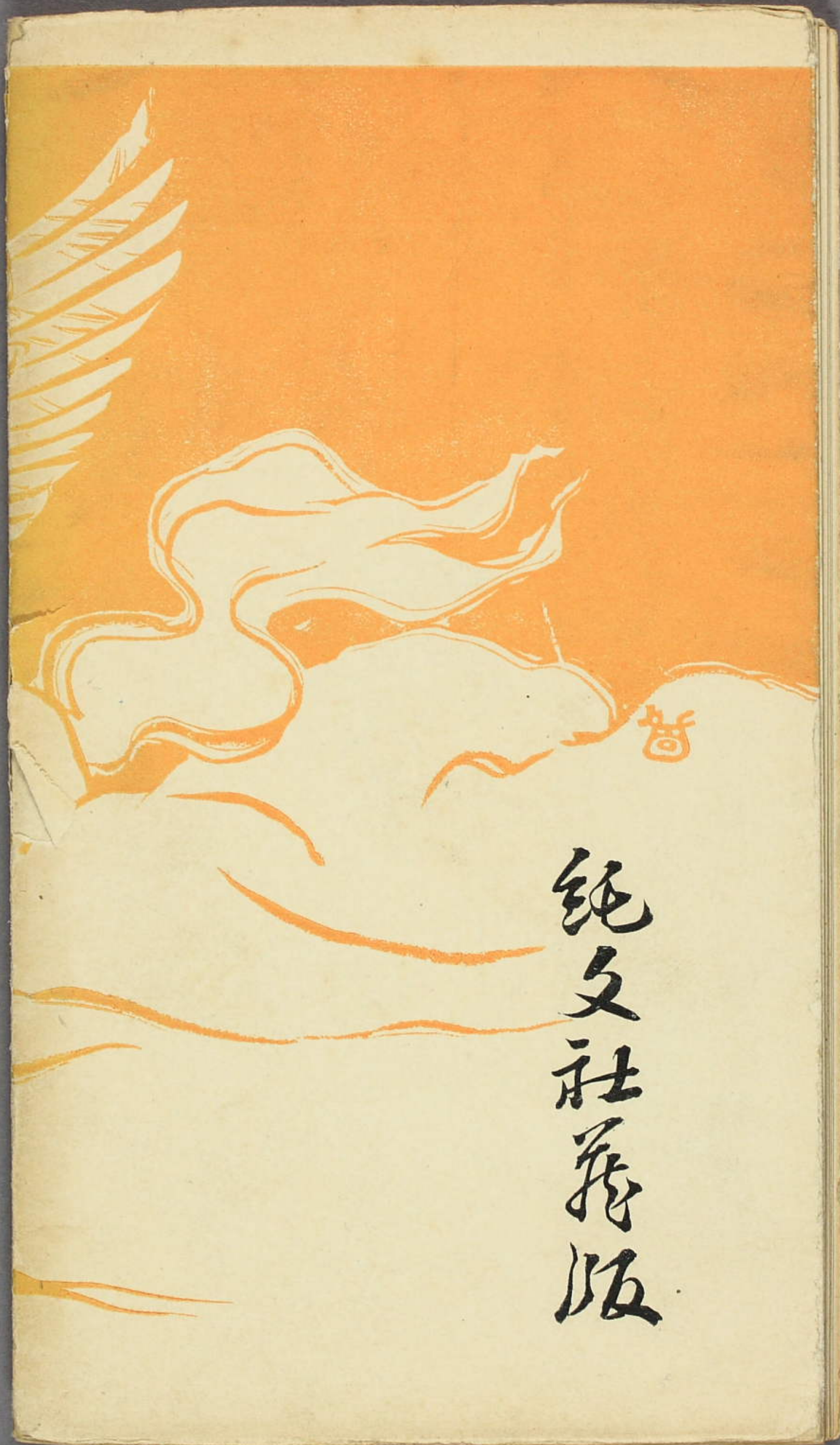
6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7



睡蓮

御風作





純文社發行

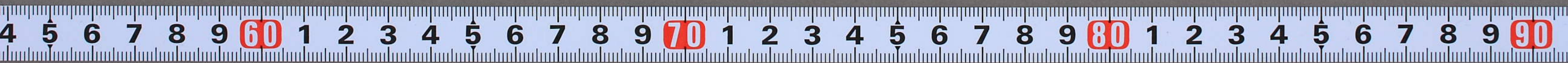


睡蓮

御風作

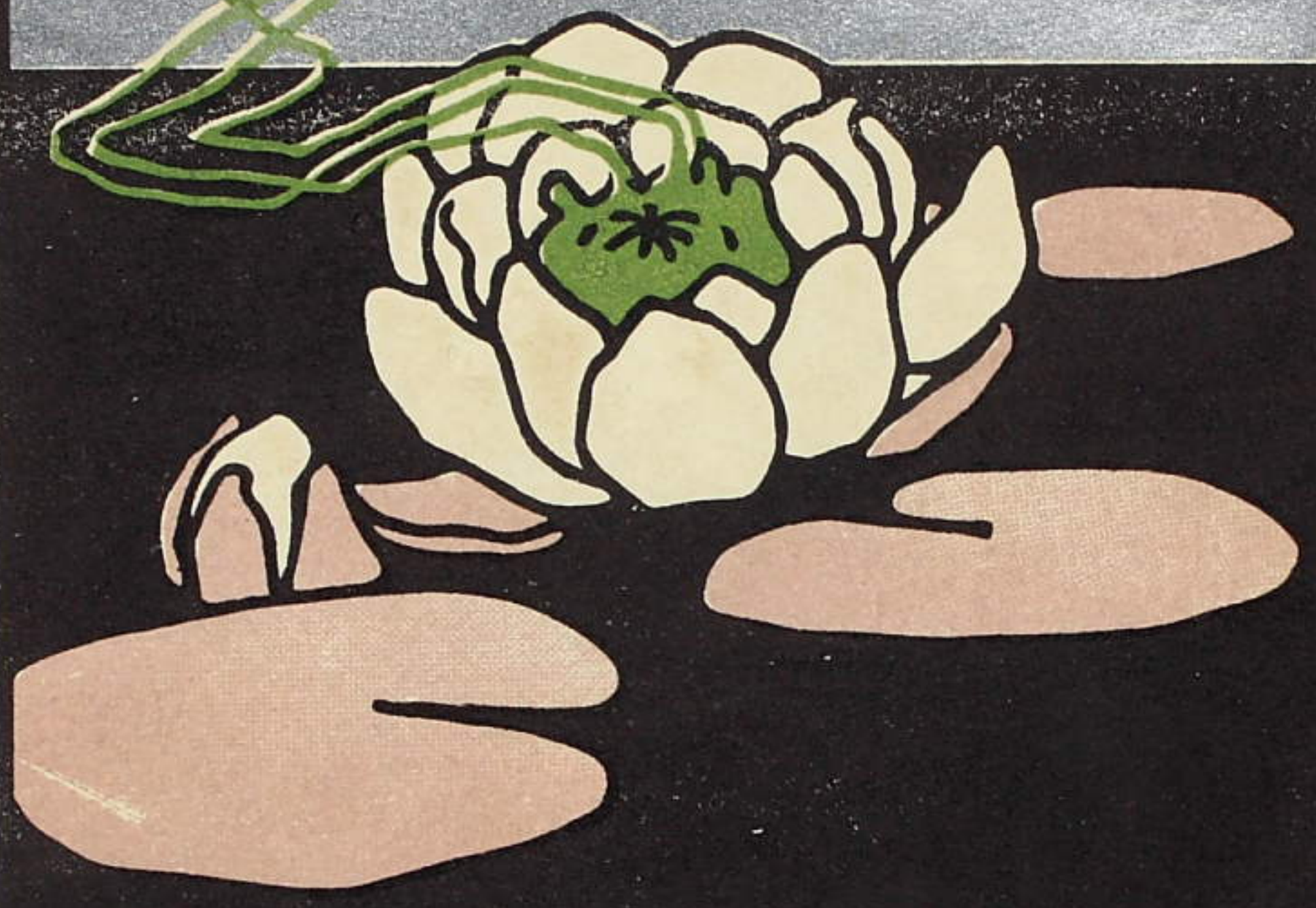
純文社發行

昔





曉蓮

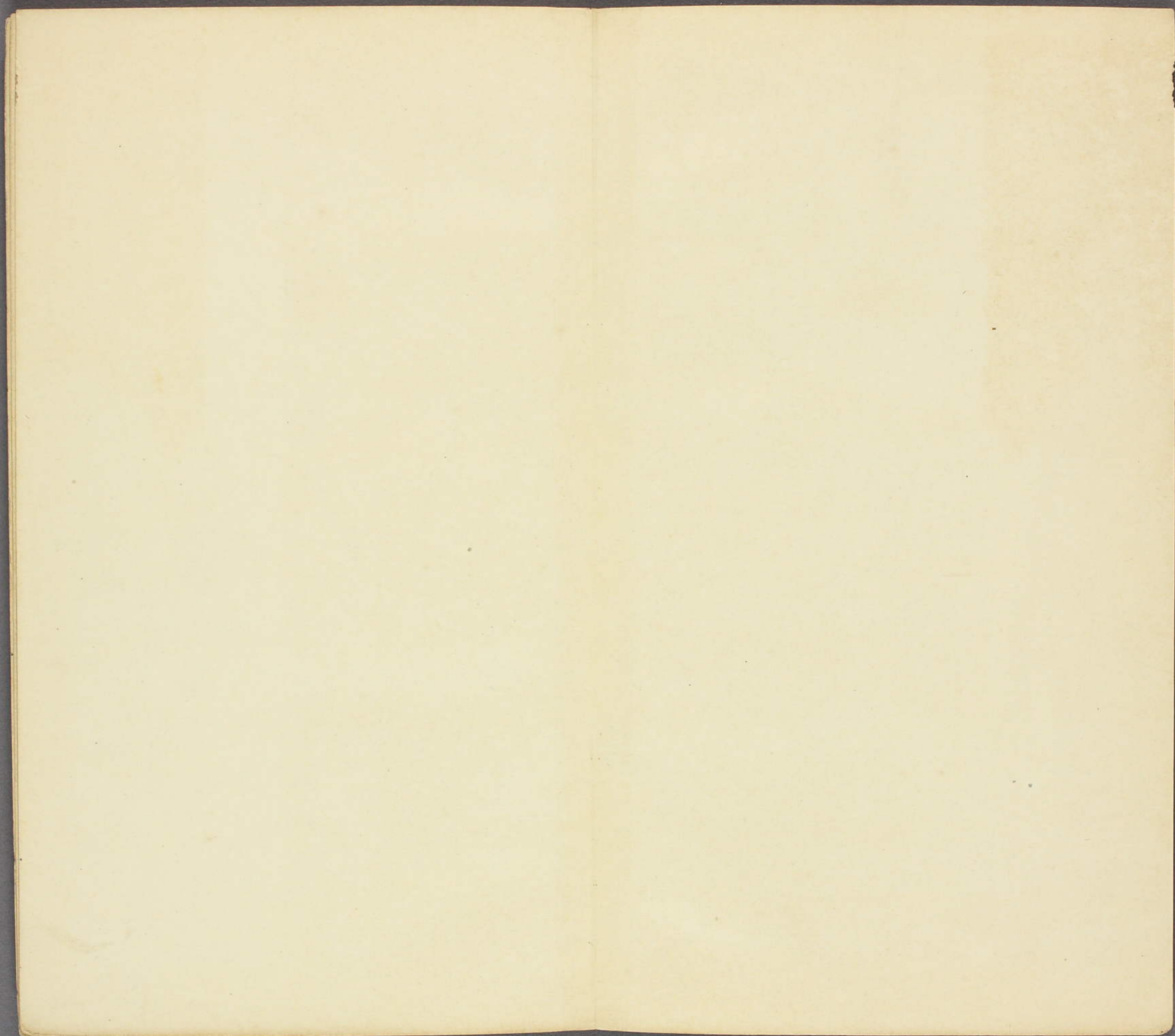


御風作

卍







睡蓮

相馬御風作

此集に收むるはかなうたの多くは曾て「白百合」外二  
三の雜誌にのせしものなり。今さら世にさふ程のもの  
にはあらねど、おもひで多きよひくくりかへし見る  
に、さすがは身にうぶ影のとりさりがたくおもはるる  
ままにかくは恥を重ぬることとなりつ。  
表紙畫并に挿畫はわが幼さをあはれみたまひてせめて  
は門出の衣にもとて、和田畫伯の特にまがきめぐまけ  
しもの、又表紙なる「睡蓮」の二字は目白僧園にます眞  
戒師の筆になれり。ここにつつしみて深きみなさけを  
謝す。

明治三十八年九月十八日

作者しるす

畫

天馬

睡蓮

天上春

和田英作畫

花 藻 夢 亂 草 天  
守 の づ れ 上  
花 花 ば の 春  
笛 香 め 守

詩

相馬御風作











睡蓮



相馬御風作

花守

今さらには賜<sup>たま</sup>ひし廣野<sup>ひろの</sup>ぞうらまゐるる夢  
みだれては若き花守<sup>はなもり</sup>

見かへるに千年百年なほたらず相見  
し宵の遠くもあるかな

神に似るはたゞ君戀ふるころのみ  
信は二人の胸つつむ彩

花かけに思ひ見るだにうつくしきわ  
が前の世ぞ星なりけらし

泣くひまに花はしほみぬ野は暮れぬ  
さていかにして君を待つべき

おち入るも淵に玉藻の香はみたまむ花  
野の果をいづこと問ふな

死の淵にうつりし影のわかさにぞう  
つくしきにぞまたかへり來し

心なく口くちにあてたる花びらに命いのちおぼ  
ゆる春のくれかか

天あまさしてなげつる花はな種ねの根はもたず  
かへりてはまたさびし野の末

つみて來し花よ小草よ今にして愁うれか  
ざるになれしわれかな

夕舟やへささに垂るる友禪の袖にす  
がりててる螢かな

このまゝに果なき旅たびのおもひする手  
とりて入りし森かけのみち

君が家やへたゝ一すじのみちなれど心  
うかりきかのうしる影

負籠おほかごに山百合やまゆりをへし菅笠かぎさの二つ暮れ  
行く夏がすみかな

いつの世か緑とりまく幾千里いくせんりなかの  
花野はなに相見あひまざりしか

いつと知らず夢にて見たる彩雲あざぐもの君  
おもふ眼めにまたもわき来る

したひよりていだく胸なき身ながら  
も泣けばたのしき戀こひのふるさと

虹にじに似てうつくしきものわれをまさ  
ただ何となう泣かす夜半かな

美うつくしき衣きぬまとはせて舟ふねにのせていづ  
こともなく君きみやるごとさ



うつくしと人にかくれてほほゑみし  
君が鏡をまづとむらはむ

うつくしき御袖といひてよりながら  
涙ぬぐふになれしわれかな

さそはれて水に落ちぬる花の種花と  
咲かむによるべなき身か

たれにとてすねるにあらずつれ  
をちらして見たり木蓮の花

春雨の垣根にわかき愁人そのまま花  
と化せばいかならむ

手枕の夢よりつづく夕もやのはてな  
る彩に君を追ひしか

なかくにうれしき戀の囚人や花の  
かこるは黄に紫に

野に出でて君におしへし花の名を思  
ひ出でては歌につゞる日

しらぬ里知らぬ野路を迷ふ子に兄と  
よばれしわが涙かな

亂れ合ひゆく繪日傘に振袖に絲遊か  
らむ桃日和かな

頬あかうて花にかくれし世すて人に  
くからずやは戀のすね人

追はば地にまたも消ぬべき羅の袖す  
かし見るおぼる夜の月

垣根ぞひかへり見がちに行く人に木  
遣ちらしふる小雨かな

君が行く里はまだ見ぬ里なればただ  
に緑のかげとし戀はむ

泣く君を中にとりまく花あやめ里な  
れまさぬ夜をこそおもへ

手をわかちつとはなれたる二歩の間  
をあわただしくもとぶつばくらめ

あやめ咲く門田の畔にぬれながら田  
植唄さくつばめやわれや

相集りて夢語らふによき朝や緑にと  
ざす温泉の宿の雨

ながれよる白き藻の花ものはなに美  
き名つけてはまた流しやる

わが思囚屋の闇に薫吹く春の風とも  
君によらまし

紫にくれ行く春の信濃路や小笠小笠  
に靄ゆれかゝる

うぐひすに餌をやりおへて見のこし  
し夢追ふ窓に春雨ぞふる

花ごろも二人かつぎて舞うてだに亡  
母招じたき野の彩霞

ちる花はみなわが胸によるごとく情  
こちたき春のくれかな

心なくちりし小瓶びんの一ひと花はなもいだかま  
ほしき夕べとなりぬ

いくたびか弱き思の子にそひて涙も  
見さや戸のくね柳

冥府みやうぶの戸とか神の御園みやうかしらずただい  
だきて墮ちし國うつくしむ

渴かきてはこがれよりぬる旅人の泉に  
だにも毒どくながす世か

れつる星きゆる雲にもわが靈たまを戀ふ  
ものありて泣くに似たる夜よ

いだかれて行くべき天使てんしのねん面おもてわ  
想おもへどただに母のみ見はて

想おもへどただに母のみ見はて

さす棹に誰が戀ねたむ唄ぞ夕べ面う  
つくしき舟人や春

藻の花

大海のひろきがなかに藻の二ひらか  
らみて咲くと見ば足らむ戀

はてもなき涙なれども電のひらめく  
ままにつとはなれたる

さびしさは君にならひし幼な心緑の  
衣きぬの身にそはぬ夏

そは夢のふるきにまがふおもひでの  
里は緑のかげくらくして

夏なつ川かはやわたるにからむ藻の花のひか  
るるままに沈まむ二人

昨日きのうかも別れしみちの戀しくて行く  
行く暮るるねぶの下かけ

御手とりてわたらせまつる反橋さかひしの下した  
をくぐりてとびぬ翡翠かほせみ

電いでんは二人ふたりをさきて野をさきて今宵も  
君が戸にまた消ぬぬ

雲なき日夏の緑の十重<sup>と</sup>二十重<sup>に</sup>なかに  
うもれて死なばや足らむ

夕ばえや軒に来てなくひぐらしの羽  
かがやきてねぶ花ちりて

夜<sup>よ</sup>の潮<sup>うしほ</sup>や流るる星や沖の灯<sup>ひ</sup>の帆影<sup>ほかげ</sup>に  
人を戀ふ子もあらむ

おもだかの池見て立てる夕庭を蝙蝠  
君が肩よりわれに

そよ風やねざめすゞしき朝<sup>あさ</sup>姿<sup>すがた</sup>蓮さる  
君と香<sup>かぐ</sup>たくわれと

泣きあきて森かげ出でしさまよひの  
二人をさへもうらやむ世なり



來し方よたとへば細き彩雲のはてな  
き闇に星をぬふごと

彩鳥の翼まかるおもひしてそぞろ  
入りぬる戀のふる夢

君をまくに小百合白百合うまし歌戀  
ならなくも地はあたたかや

戀してはわれも神人の額に百合花  
かざす興も得てがな

夢かあらずただあかつきの緑野に影  
追ふごとさわがおもひかな

ただひとり野にのこされてなつかし  
といださし花になど悔あらむ

壁書には見ぬ世の人の戀そめてとこ  
しへ酔はむ面影の宮

むしろわれ君がやさ手に毒うけて死  
なば足るべきこの夜頃かな

夕やみを香の烟にうたれては螢みだ  
るる墓もるわれに

星二つ遠き荒野と荒野とに墮ちて戀  
ふるに似し二人かな

かへり見て二人生れし野をおもひ迷  
うて來つるわれをかなしむ

山やどり爺が斧とぐ枯うたのとぎれ  
ぎれをなくほととぎす

市いちにして岩いわに耳みみあて遠とほき音ねの世よの潮しほ  
わぶる流なみ人ひとを見たり

何なにをかもゆめみがほなる御み佛ほとけの瓔そう珞らく  
ゆりてふく青あおあらし

夏なつ花はなにうもるるとき野の墓かぶに袖そでか  
けながら朝あさの雲くも見る

めてられて市いちにおどりし昨日きのうをも土つち  
にかへるをなかじ破やぶれ瓔びん

酔よひてさめて戀こひの盃さかくだく日をまた  
むと神かみのたわぶれまさは

われとわがなげし眞ま珠たまの果は追おひて迷まよ  
ふ世よ予よとも疑いひそめぬ

手さぐりにかぼそき糸もたのみつる  
詩の宮遠き胸の迷路

わが笞人にとらせてうたせてぞ笑ま  
むはむしろやすき今なり

かへり來ぬ羊たづねて野のくれにわ  
がふく笛の音にまた泣きぬ

重ねても面に足らはぬみじか袖たま  
たま人の怨みおひぬる

おそろしきものに追はれて來しごと  
も故郷小野に世をかへり見る

うつくしき花のこぼれをひらひつつ  
「時」の木蔭を來し二人なり

たどるこれ聖なる影のときめきや世  
のさいなみに面はやせぬれ

かよわきも神のゆるせし花の力開く  
に散るにたが手からめや

わがわざを昨日かわれとうたがひし  
なるれば石もあたたかき世か

来ますたびかざしませよのねがひの  
み日ぐるま植ゑしわがかさね路

青淵に二人手をとる藻の花のかほそ  
きをひく今のおもひや

藻の花や夕雲うかぶ湖の岸行くふね  
の櫓にほのじろき

うつくしき人を千里のはてに立たせ  
笛して來よとよぶにも似たる

ことさらに放ちやりては雛鳩の翼に  
淡き夕日影みる

しばしだに「時」の車の輪をとどめふり  
かへり見む神としもがな

花ごろも舞ふ袖いかにかろくとも野  
に鶯の夢さまさざれ

あこがれの一夜ふた夜の手枕を人に  
わけたさ孤獨の身かな

うかりける思をまたもくりかへし人  
泣かせたさ宵にもあるかな

光<sup>ひかり</sup>とは仰がむものか身にあびてほこ  
らむものか地なるひとり子  
かへり見てわが立つ野邊を疑ひつま  
づ垂れそめしわがうなじなり  
うしなひし靈<sup>たま</sup>はおもはずすてつべき  
むくろ何しかわれにかなしき

おのづから病みてもだへて得し光い  
つより歌の名はそはりけむ  
啼く鳥になくよしきける賢<sup>けん</sup>人にわれ  
らの歌は秘めしめたまへ  
めざめしは無<sup>む</sup>絃<sup>げん</sup>の琴のろら音のみこ  
の子ふたたび何枕せむ

かばかりの世にほこらむぞまどひな  
る君よしばらく眼とぢませ

力なうもたる岩や藻の花のながれ  
よりつつ今日も日くれぬ

蚊帳越しに香の烟のみだれ香や水  
に明けし雨のみじか夜

うすものの裳裾を袖をこぼれては螢  
みだるるおもだかの池

ゑませてははた泣かせてはかさ抱き  
たはぶれまさむ神の御意とか

すがる手をほどかむほどの御力にな  
どかこの子が額わらぬ神



地におちて青葉のかげにはぐくまれ  
いつとは知らずちさき夢えし

かくてただあこがれ行かば野の末に  
美しき子に遇はむとぞおもふ

すてられてあるは迷ひて來し靈の花  
野にかへる彩がすみかな

うつくしきほほゑみめてて相よりし  
君が頬に見む涙なりしか(なやめる友に)

その瞳その胸もちて鳩と生れ鳩と死  
にしぞただうらみなる(以下三首友抱影が家の鳩の死にけるに)

天の園花のしとねの夢路にも地なる  
情の友かへり見よ

はかなしとちさきながらに觀<sup>らん</sup>じきや  
さびしかりけるなが腫<sup>ひよみ</sup>かな

まるらする香<sup>か</sup>の烟のみだれにも心お  
かるるこの夜ごろかな

眼<sup>め</sup>をとづれど虹に似るもの亂れあひ  
て追ふにくるしき君がおもかけ

夕ばえの野を行く人と森づたひかけ  
行く人とよびかはすごと

黒髪のみだれ頬をうつねもひして花  
ちる中をおののきて來し

幾千の博士學者がむづかしう「人生<sup>よ</sup>」と  
云ふものかわれのこしかた

夢つばめ

信濃より今日も若葉の嶺越えて母な  
き軒をなくほととぎす  
あやまちて遠き來む世を今にして生  
れし二人の罪にかあるらむ

さなきだにすつべかりける歌卷の炎  
となりて胸まく夜半や  
ほととぎす明くれば郷へ入る旅の夢  
のまにまに人戀ふ夜かな  
幼うて去年を昨日を見かへるによき  
かくれ家よふるさとの軒

ある夜ふと瑠璃の御殿にさぶらひて  
何とはなしにねほえにし歌

うたがはば珠のかひなも罪と見む戀  
はうつろの胸にもゆる火

詩や戀や「時」の梭手に織られては天地  
つつむ錦あや衣

ふと立ちてよぶ人なきに來しごとく  
三年ねぼろの戀のおもひで

いつとなうよるになれにし古びさし  
忘れてはまた人の待たるる

この二人花とも咲かず火とも化らず  
戀ふるぞふかさえにしとおぼせ

ある時は百合ともめてし御小胸の底  
のうれひに今日泣かむとは

つたなくも歌よむまでになりぬとぞ  
御墓はらひてつげまゐらせむ(亡き母の御墓に)

母の柩かつぐに足らぬ手力を泣きし  
ぞよわきはじめなりしか

「今宵」をば永久の旅路の一夜とも終の  
ねむりの臥床とも見る

何となく人なつかしき夕べやとむな  
しう閉ぢて戸に歌をめぐ

れもはずも涙れとしてつみし野の小  
草に花のなさをうらまぬ

慕ひよりて追はるるものか罪<sup>つと</sup>負ひて  
墮ち行くものかかの流れ星

啣<sup>くは</sup>へてはいづちへいぬる夢の鳥その  
靈むしろかへさずもあれ

相いだく二人は知らずその宵よ翅<sup>はね</sup>あ  
る神のねたう見けらし

紫の御<sup>み</sup>袈<sup>け</sup>裟<sup>さ</sup>にふさふ秋のもやゆくて  
野菊の路ほのじろく

鈴虫が露の戸に立ち松虫の音<sup>ね</sup>に鳴く  
ごときわが涙かな

いかなればつめたき石に名はさざむ  
さかしらなれや人のたはぶれ

あやしげに啞の子われの笛うばひ口  
にあてては母泣かしつる

ぬかづくに神の名しらぬかたくな子  
「自然」はやさし今日も容れつる

ここよりは君が領ぞと祝はれてなほ  
入りかぬるわれにもあるか

小雀も百合に集りては靈と見ゆ戀は  
花はむ虫なりけらし

うたうてはみづから恥ぢず世に怖ぢ  
ずおぼろげながら尊とかりにし

一片の花にもちさき夢ありと博士せ  
めてはうたがひたまへ

うつけては「時」の女神の歌聲にあざむ  
かれつつ來し世とも見る

仰ぎては語るに今ぞなれつるよ御空みそら  
の友はわれいつはらぬ

野の星に身を忘れての夕ゆふいのりかく  
てはつべき我が世ともがな

こざかしきのろひもなにか詩しの神の  
御手みでさぐる子よ世にねろかなれ

病みて泣きてねもはず合あす掌たなごころもく黙もく示し無む  
限かのそれか秋の聲

悶もんえあらばもだえのままに行かしめ  
よ終つひの吐と息いきぞただに尊たうさ



寺やどりまろねの椽えんに紙燭しそくして虫よ  
びながら瀧たきさく夜よかな

萩の戸に風する夜よなり沈ちん焚たききて静しずか  
に靈たまの行ゆ方へさだめむ

水の音に穂すすきゆらく一ひとつ家やの軒のち  
にしのびて虫さく夜よかな

こざかしきうごめきのせてめぐる地ち  
を星いくとせか笑みて見まもる

おちて凝こりて涙よ白き百合と咲けや  
すすき眠の園のぞなが領りやう

夢追ひてはるく來くつる帝ていの領りやうあな  
さてまたもかへれとや君

弱からば弱きがままに神にゆけみち  
に泣く子を誰かへり見む

靈ありく出てはちさきもぬけが  
らあざけりつつもかへりてぞぬる

何と知らず得たるを闇にうつくしむ  
かくて此子が信なりや神

詩は人をよみがへらする靈の泉神と  
よばんもはばかりな君

放ちてはれどらしむるに舞はしむる  
にかの空高し靈をとざさぬ

あめつちにかかれる琴の音にふれて  
細うもあはば足らむわが笛

詩と云はじねもひと云はじ此ぬかに  
れのづからなるこの光なり

ちさき子がもだえのあとと見ば足ら  
む誰がねもひてやわが詩わがうた

ためらはす胸の小琴の音につれて歌  
ははやすすきわが世なるらし

ああ、炎、何をうらみの乳母が家幼きわ  
れの夢もこもるに(以下五首故郷なる町の焼けたる時)

魔火なれば切風なればぜひもなしせ  
めてと庭の花つみてにぐ

家一つなに惜まむやかへり見ておも  
ひでなくばわれも泣かじを

金<sup>か</sup>絲<sup>な</sup>雀<sup>り</sup>の籠<sup>かご</sup>背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>はせてやりし子<sup>こ</sup>があ  
とをな追<sup>お</sup>ひそ炎<sup>えん</sup>よ風<sup>かぜ</sup>よ

か  
の  
星<sup>ほし</sup>ありか  
の  
波<sup>なみ</sup>あれば  
なほ足<sup>あし</sup>れり  
焼<sup>や</sup>樹<sup>き</sup>に倚<sup>よ</sup>りて  
夢<sup>ゆめ</sup>やたどらむ

亂<sup>ま</sup>れ香<sup>か</sup>

野<sup>の</sup>を越<sup>こ</sup>えて鐘<sup>かね</sup>の音<sup>ね</sup>低<sup>ひ</sup>う北<sup>きた</sup>に迷<sup>ま</sup>ふあ  
あ  
今<sup>いま</sup>かなた誰<sup>たれ</sup>が妻<sup>つま</sup>か死<sup>し</sup>ぬ

戀<sup>こひ</sup>に泣<sup>な</sup>く人<sup>ひと</sup>の頬<sup>ほ</sup>をふさわれを吹<sup>ふ</sup>き秋<sup>あき</sup>  
風<sup>かぜ</sup>母<sup>はは</sup>の墓<sup>はか</sup>へと吹<sup>ふ</sup>きぬ

君が戸にも同じう泣かむきりぎりす  
よびてたがひのうたれしへばや

さびしくば夜ごと枕にわが名よべよ  
びつつわれも袖まさてねむ

秋なれば夢は幼きうれひのみすねむ  
に母のなきをうらみぬ

くろがねの筈しもとに泣きし昨日だにわが  
世と見ればまたなつかしき

やせてわびて罪ぞとなげし小鏡かざみのく  
だけしなから秋の日くれぬ

うらがれてはてはさびしう江に朽ち  
む葦あしなになれば笛にふさへる

迷ふ子の袂ひきてはためらひぬさび  
しわが里たれにふさはむ

わが胸にしみぬる宵のやさ夢もわか  
たまほしきねだまきの花

すがるべき一人の母ももたぬ子に郷  
はつめたき墓とし泣かる

さざみ行く『時』のひびきかたえだえに  
わが胸せむる壁のこほろぎ

ともすれば男にも似ぬ涙ゆえ葬りか  
ねし夢のなきがら

とる御手をおるはつめたきやいばともあ  
ののきたりし夜ありとおぼせ

かなしくば二人相去る幾百里知らて  
生れし日をおもひませ

秋の夜を清きうれひの少女子が涙に  
ささし花か白菊

刃とりて死なんと云ひしろの手と手  
いまうつくしうとるよ神前に

おもはずも二人來し野のかへり見や  
涙にあけし花のあけぼの

きりくすはじめてささし夜の枕雨  
の音して朝さめにけり

かのひと時靈は去なせし二人なりむ  
くろのわかれ今うつくしき

あるじなき戸をおとなひて立つおも  
ひ聖壇まぢかに手は合せども

彫られしは遠き御園の戀の扉の消え  
ず消されぬ名とれもひませ

召されては御神にまゐるうたの子が  
うたうて行かばたらむ短か旅

花に見よ色いつはらぬ野のおごり幾  
とせ人のかくれがちなる

さびしくも神の御名もてたたへむに  
秋花などて世にたらはざる

ちさき身にも眼ひらきて才たびし人  
よ御神の寵あやまるな



道に泣くや戀ひて死んやいづれきよ  
き裁判は神ぞ人よ手入れな

罪負ひて荒野を一人まよふ身かそれ

かとばかり世をせばめ見る

そむきてはいにてはまたもかへり見

る怖き御神の御手のひと花

大いなる御手のまな子よ幸の子よ春

のぬたみをもれて來し蝶

まよひ來てなづる枯野の一つ石石な

になれば神にかへらぬ

仰ぐ星ふむ地いづれ泣くによきわれ

と眼のしひたりな今

得なむものか得させむものかああ光  
人泣かせても人死なせても

またしても闇より闇にかへされぬ光  
よちさき夢にはあらぬか

わが幸は花野にすがる神ならず沙漠  
の泉汲まはつきぬべし

あめつちに一人のわれとめざめては  
一人のわれとよみがへりぬる

打ちもせじ打たれもせぬにさばきと  
てわれからちさき坑あなに入りますな(人)

ざれうたに巖いははうちてもあるべきにと  
すればせまきわが世と泣かる

歌はつひにわれとさびしう泣かむ具  
よふたたび神の御名は汚さじ

詩に酔ひてはたまたま人を失ひき歸  
るに里の名も忘れにき

あやまたず射つるいさをも咀ふ世に  
弓絃たびにし神うらめしき

戀ふ身には一夜波なき胸ほしき昨日  
を明日をねもひ見るべく

めざめては胸なづるさへものうきを  
なにとて夢の忘れがちなる

今更にかみてすつべき『生』の實かにが  
きをしひてよる胸のなき

野の神のたはれと見むも  
うれたしや  
秋を得て來しわが詩の翹

闇ぬうてはかなう消えし  
うす光ふた  
たび胸によびもどすごと

罪の子が死の洞ふかう迷  
ひ泣く宵に  
もあるか秋のさびしら

いだかれて眠りはしつれ  
夢の手にま  
かせはつべきわが靈ならぬ

いつしかも天白百合の  
かげにしる露  
としむべきわが情かな

ことさらに弱き子泣かせ  
夕御酒の魔  
の興にとてふくか秋風

うれひのせて深洞にはこぶ羽車か秋  
風戀の二人はさけよ

波の音にふとよき國のしのばれて打  
ちし石にも涙おぼゆる

疑ひてわれから怖ぢし弱き子がはて  
にも似たり亂れ紅芥子

他人の世をともに泣きにし昨日さへ  
二人に惜しき涙なりしか

開くとて光に死ぬる愚はまねじ神  
秘  
さながらいだきてゑまむ

おごそかや光あふるゝものからにわ  
が手うたがひたぶをいなみし

『時』ありてわれらが世をもかぎりつる  
死の手からずば開かれぬ戸か

こざかしうわが歌そめむ帛きぬとふか仰  
げよき料りょう秋の夜の空

消されては地ちなるわが名に泣きもす  
れ神うらみむに悔はなき子ぞ

いたづらに筆かむ子らに詩しは問とふな  
天あまさす指を人にもとむな

いくとせをみづから死しなず額ぬかわらず  
御歌みうたずしてはよみがへり來こし（詩の友に）

かざしは百合、世にあるほどの詩人うたひに  
うたはれぬべき戀もせましや

舞ふべくば藤の瓔珞桃の衣二人が戀  
に野を彩どらむ

追ひ來しはまぼろしの美よ夢の美よ  
戀なき人を影と見る今日

ただにまけ戀の彩糸神の手にさゝげ  
ば足らむ「時」の小車

まかれては珠のかひなぞ神らしき戀  
は光の國に入る門

秋花のちさきがかげにはぢらひては  
ゆしと見たる世にもありしか

にくからぬ男とだにもよばれなば秋  
にはやらぬ涙なりしを

はなちてはまたなつかしし彩鳥の翼  
にゆるる秋の夕もや

れごりならじ天なる星の戀妻とふみ  
し人だにうらみ得ぬ身の(野菊のうたへる)

天の戸に戀としもなきあこがれのほ  
まれにたびしわが歌の筆

召されては百合の宮居にまゐる子に  
衣させわぶる母もある世か

ことさらに詩の花園みださじと二人  
にゆりしみちか彩虹

さかしらや花にそむきて法は説け花  
にもるべき法はなき世か



かざす手に光はそひぬつまれたる花  
にもわかき血ぞめぐりぬる

百合ばなにつつむと見てし夢の手を  
いつのがれても來しやわが靈たま

悲しとてわれと斷ち得ぬ琴の緒のか  
ほそきだにも惜しさいのちや

のがれ來しわが身ながらに何となく  
獄屋ごくやの闇のしたはるるかな

もろければぞくだけながらの榮はえあら  
むろの珠神たまがみの御膝みひざになげよ  
(以下二首心の友なにかしに)

ゆるしたまへたゞほほゑみてわかる  
べき君と見たるぞあゝ昨日なる

草 笛

泣く身にも夜毎の夢はうつくしきい  
づれをわれの世とうたふべき  
別れてはむしろ人なき森かけにさび  
しき胸に君を戀はまし

病めばただ歌におもひの足る身かな  
合すにちさき掌ても二つあり(以下二首病床にて)  
時ありて眠れる靈のさむるごと病み  
てたまたま尊たふき我われ見る  
かへり見ればわれやあまりに弱かり  
き弱きがゆえにたふとかりきや

青葉かけ同じゆめもるはらからが歌  
に來て啼け山ほととぎす(以下四首北信の旅にてうたへる)

閑古鳥寂にあきたる山靈のたまたま  
われをよぶにも似たる

かへり見て戀ふる人だにあらなくに  
越えぬる山のただなつかしき

かたむけし小笠に情はこもらねど千  
曲川原のただなつかしう  
馬の背に遠雲見やるみどり野や馬子  
は唄はて物思ふ間を

夕もやは行く子行く子のあとをこめ  
春を送るによきすがたかな

夕潮やゆく帆かへる帆紫のうすもや  
かげを天華ちるごと

眼をとづればものみな白き雲にとけ  
てわが身さながら空かけるごと

母とよびて乳房にめざめ柩送りかく  
て一人を世に失ひき

灯によりて追はるゝ蛾のごとも光の  
かげに怖き手を見し

やがて地の下にくむべき君が手やわ  
が手と知れどとればうれしき

泣きにとて來し身ながらに花かけを  
歌のねもひに泣かてかへりぬ

春雨は物思ふ子と鶯と歌よむ人をぬ  
らすにぞよき

春雨の庭うつ音と夢の樂がとつらなる  
きはに君は來にけり

名も知らぬ里を慕うて迷ひ來しみち  
にしあれど風こころよき

めざむれば花は額ひたひに胸に手に誰がい  
たづらぞ釣床の夢

わがうたをせめて夕戸ゆに誦ずす子得ば  
このうき秋を手とりて消えむ

さりくすみゆびたゆたふ琴の緒の  
ほそきにすがり泣くと夢みぬ

君ありてぞわが靈天の座を得しをほ  
こらしげなる人よ教よ

明日はまた夕戸に歌のうかる身のな  
ずや春風われゑはしむる

うつくしき大蛇したしむ子はねるか  
あろかなる子やまた戀にぬる

かへり来てわれと老いぬる浦島の爺  
にくからぬこの夕べかな

細う落ちて細うながるるわか葦の露  
なり人のほそき朝夕

孔雀羽の左には君右にわれいだかれ  
て見し夢や戀なる

かざさむに胸に日ぐるま額かぶに百合戀  
讀ずべく夏ぞよき國

とかくしてあるにあられぬみどりか  
げわれよぶ聲の右に左に

靈たま今し若葉につづく幾山やま河かは蛙かまづ雨よぶ  
君すむ里へ

おん夢に何のさまして入りぬるや夜  
な　く　君にやるわが夢の

一ひと年としの夢とむらはむ古塚ふるかやゑみて彫ほ  
るべきれもひでのなき(以下三首一とせのくれ日  
記のおはりにしるせる)

何となきこの一とせのうきおもひう  
ぐひすよびてはませむもよし

百八の一つの鐘の音におもひて  
よせて年おくりやる

美しき珠つなぎ行く心地して一とせ  
ごとくに夢多きかな (以下三首年はじめに)

行く年の車につみしふる夢のこぼれ  
てさらに新たなる春

今日よりはいかにひらかむ繪巻物「時」  
の畫匠またあらたなり

さばかりのもたえと花に笑はれて泣  
きて泉ににげ入りしゆめ

春今しただかひいだき戀いだだきわ  
が歌聲に舞ひも來しかな



彩雲かあるは御神のおん裾かあるが  
むぬかにまばゆかりにし  
ただ一人光あふるる野に出でて行方  
忘れしわれにもあるか  
なにとしらず尊き御手にいだかれて  
ただある身ぞと思ふ夜もあり

すてていにし主は、らねど夕まよひ  
野にえし笛のふくにえ堪へぬ  
夢の野にいつしか得たる草小笛ふき  
つつ來しに身はやせにけり  
美の神のおん額かざる二つ星地にし  
ておなじゆめのはらから

(以下二首折にふ  
れて友抱影に)

さばかりにもだえはおなじ地ちにあり  
て君と二人は美よき日にあひぬ

夢ぬけてと見る百合の香彩あざ霞舞がすみひ來  
しむれに君をえらびぬ

夕窓に鸚鵡かきすゑては人待つとやさし  
男をとこを都に得つる

さびしさをしたしむまでの身となり  
ぬかかるを人の老おきなとや云ふらむ

天あまの戸に二人のうたはしるさむと弟  
さそふわが兄もがな

まよひ來し山吹がきねもやの朝夢さ  
ながらの人を戸に見る

垣ごしに夕雨あかさ落椿褻おもたげ  
の子や西の京

みだれてはたびし御うたうらめし  
きああまた今宵笛はわれたり  
うつくしとめててやみなむ花ならば  
つまじつまざれこのこむらさき

いかなれば弱うもねつる涙なる御神  
に寵の君としおもへど(以下二首友の死に)

きよき手にきよきおもひの君いだき  
神はこの世のうたきさまさむ

など夢にいまはによびしわれの名のほそき聲だ  
にしみはこざりし(以下母なきわれの母ともたのみし乳母の死に)

この春はかならず來よのつて言は墓  
に泣けよのまねきなりしか

ひくき軒やほそき灯やひろき爐や通  
夜の一人にわれもとむらむ

とむらひのむれは泣く子の手をもひ  
きて今し雪つむ門邊出づらむ

都にもよき友ありと一人子をきづか  
ひまさば母につけてよ

天の座に母とあひ見ばたけのびてう  
たさへよむとゑみてかたりね

罪なりとも天に入る扉のかへり見に  
せめてはわれの夢にうつりね

郷人よせめて墓石の面にわが泣く  
方にむけてすゑませ

天に行くなれとおもへど何となくつ  
めたき闇にやるこちして

いとせめてこの身この胸なが乳のか  
たみとだにもめてて世を経む

天上の春

二人地になつかしみてしむらさきの  
星よこれなる座にぞありける

天にしてあこがれつきずわがなやみ  
神の御手にも涙おぼゆる

あなたふとわが舞ふ袖の光にもあこ  
がれあふぐ地の幾千人

わが室の鍵はたびつれさびしらや君  
待つひまを花つみてねむ

歌はみな珠扉に彫りて地のおもひで  
泣きし昨日のおもかげとせむ

昨日まで泣きしわれともおもほえず  
舞ふ袖かろきあめの庭かな

ああさらに想は遠き八千歳の神たり  
し身の幸れもほゆる

ここにして地の春見ればまたなつか  
し東の間だにも涙はほしき

東の間の夢とおもへどしかすがにす  
てもかねつる地のれもひでや

人ならば衣もまとはめここに  
して乳房はたれにはぢて蔽ふべき

君がぬかにこれぞふさはむ常世百合  
花環つくりてまぢもあらばや

いつの時か二人の歌をそめて見しそ

の花神の御手に見むとは

舞の庭百合環かざせる女の神のなか  
に見るべき君をまつかな

罪おひて地におち行く星にだにこと  
づてもせば君は來べきか

つれくを つみて おとしし 一ひらの  
花にのり つつまた 靈れいの來る

しひられても 舞はてやあらむ 天あまの庭

金きん鼓こうつべき 君來ざる 間は

今にして ねもへば さらにならう つくしし

君ありてこそ 神も戀ひしか

しるさむにわが名は づかし 神の帖ちやうダ

ソテの御名みかも見出で つる今

いづかたに父やまします 母やゐます

情なさけは 天あめにすてよとか 神

ぬぐはれてなほものたらぬ 神の膝涙

はとはにすて得ぬ子なり



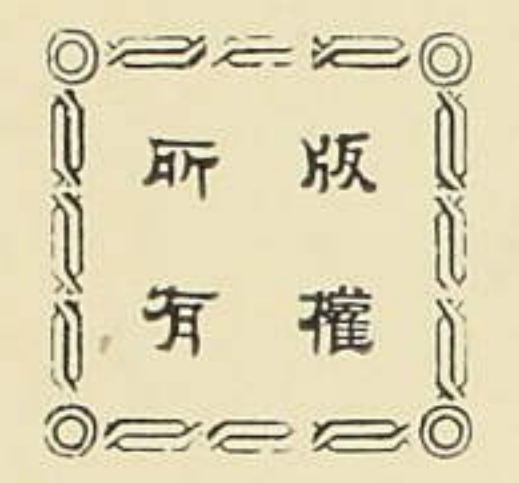
蛾がのむれが天あまの灯ひしたふあこがれと  
 わらふ世よ人びとになにつたへてむ

睡蓮畢

明治三十八年九月三十日印刷  
 明治三十八年十月十五日發行

\*\*\*\*\*  
 定價三十五錢  
 \*\*\*\*\*

著者	相馬昌治
發行者	東京純文社 <small>東京市神田區三          丁目一丁目</small>
右代表者	前田儀作 <small>東京市神田區三          丁目一丁目</small>
印刷者	白土幸力 <small>東京市神田區美          土</small>



大賣捌 東京堂 上田屋 北隆館 東海堂 服部書店

